＜マルサス型結婚＞が歴史事実であるとマズイか？

MacFarlane, *Marriage and Love in England.*

Chapter 01-02

鈴木繁夫
名古屋大学国際言語文化研究科

チャールズ・ダーウィン

- ダーウィン（29歳）はいとこのウェッジウッドと結婚を考える。
  - (1)結婚年齢は当時としては高齢
  - (2)結婚の決定は自分でする
  - (3)結婚を商取引として考える。
- 最終決定はマルサスの『人口論』（*Essay on Population*）
- 死亡率が高いと、最適者のみが生き残る。

マルサスの論点

- (1)人間は性交への欲望で動かされている
- (2) 死亡率が低いと、性欲のために低年齢で出産すると人口が急増する。
- (3)経済成長は人口急増に追いつかない
- (4)経済成長によって余剰が生まれた場合、余剰は人口の増加によって吸収される
- (5)人口増加は自然災害・戦争によって抑制される。

アダム・スミス

- マルサスの論点は18世紀の社会経済学（アダム・スミス）の前提。

- スミスの斬新な論点
  - 人口数を規定するのは、食糧や技術ではなく、雇用機会の多寡。

マルサスの加筆

- 前著の(1)—(5)は法則ではなく仮説[理念]
  - 北欧旅行し、人為的に晩婚化が行われていることを発見。
  - そもそもイングランドは晩婚型。

- イングランドの四階級（富裕層、中間層、日雇い層wage-earners、召使いservants）の富裕層は晩婚化が著しい
- その理由
  - 男性も女性も、配偶者と子供を持てば、独身時代の人間関係を保てない
  - →生活水準の低下、社会身分の格下げ、余暇の剥奪

- 中間層も晩婚化
- その理由：
  - 安定した資産と収入が高齢になるまで得られない

マルサスの前提

- 社会経済上の価値観と心理生物学的性欲とが拮抗していたが、社会経済上の価値観に従って人々は行動している。

- 社会経済上の価値観の内訳
  - (1)社会階層の上昇を目指す
  - (2)個人資産の保全が、政府によって保障されていた
  - (3)余剰資産を文化投資に回すことができた
  - (4)経済成長が可能な状況
  - (5)雇用機会は経済成長に遅れて生じる

作為と必然

- 'The operation of the preventive check in this way, by constantly keeping the population within the limits of the food, though constantly following its increase, would give a real value to the rise of wages and the sums saved by labourers before marriage.‘ (MacFarlane)

A) 人間の作為：社会経済価値観から晩婚化が実践される。
B) 機械的必然：食糧の限界が、絶えず増加する人口数を抑制している。
C) 社会的必然：晩婚化と食糧限界による人口抑制が、給与の増大へとつながる。
D) 社会人類学的必然：女性・子供の雇用機会も増えるので結婚への決断がつく

歴史人類学の軸

- (1)結婚の目的と機能→宗教と社会思想に関連する

- (2)「まともな生活」の水準をどこにおくか→低いほど早婚になる

マルサス型結婚の重要性

- 18世紀半ば英国で人口急増の原因
  - (1)高出生率が高死亡率と相殺していたが、衛生状態がよくなり疫病が減り、死亡率が落ちて、その結果、高出生率が維持された。提唱者：Thomas McKeown *Population*
  - (2) 結婚率が上がり、また結婚年齢が下がったため出生率が増加した。提唱者：
    - Habakkuk

- 受精率が上がることはありえない。
- 5歳以上結婚年齢が下がらないと、出生率は大きく上がらない
- 人口に対する出生率は一定である。
- ↓
- ？

＜積極的抑制＞

- **マルサスの考える＜積極的抑制＞という重しが18世紀半ばに弱まった。**
-
- (1)女性の結婚平均年齢が25歳以上
- (2)生涯独身女性が15%以上
  - 提唱者：John Hajnal:

ケンブリッジ人口胎動学派の業績

- 出生率が上がっていない。
- 生涯独身女性の率が下がる
- 初産の年齢が下がる→非嫡出子の出生率が上がる。

重要点と問題点

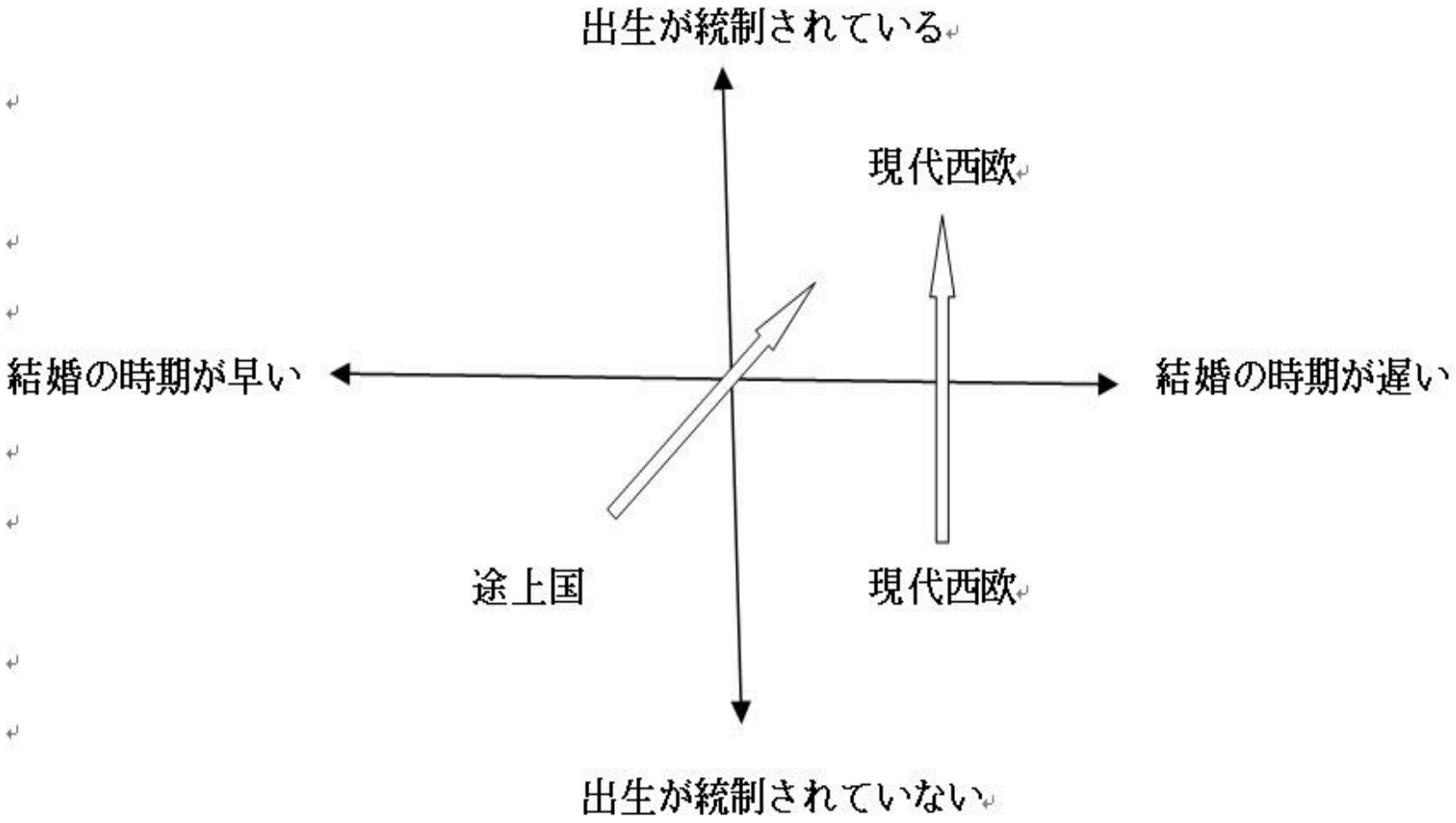
- (1)実質収入が高くなると出産の決断がやりやすくなる。
  ←経済が良くなっても人口増加まで20年間のタイムラグがある。
  - (1)とは別なもっと普遍的な規則がある←実質収入が落ちても労働者の出生率は上がっている
- (2)実質収入に対する人々の考え方が結婚率を決定する【←ここの議論は意味不明 本文30頁】

- (3)フランス・スウェーデン型（農奴が変数）では人口増加よりも土地所有数増加が少ないために結婚がしにくくなるのに対して、イングランド型（収入が変数）では収入によって結婚するかどうかを決定

アジア諸国で20世紀後半に出生率が落ちたのか

- 解答:
- マルサス型抑制の重しが減ったから、出生率は上がるはず。
- ところがマルサス型損得感覚によって、独身の安逸や子供のいない結婚への志向が高まる。
- 【マクファーレンの混乱】
- マルサス型抑制を二つの異なった意味で使っている
  - (1)小収入なので結婚願望があるにもかかわらず自己抑制し、結婚を遅らせる→経済的動機
  - (2)高収入で結婚願望があるにもかかわらず、家族を持つことが自分の自由を狭めるので、結婚を遅らせる→安逸志向

結婚と出生率の関係



マルサスの論点：悪循環

- 【人口増加が無前提にプラスと考えられている】
  - (1)人口増加は、経済成長が起こる以前に発生し、経済成長による豊かさを食いつぶす
  - (2)食いつぶされて人口増加には歯止めがかかる。

- 資本主義の貢献
- 悪循環を絶つために、人口が急増しないような施策をする。【ここの議論はきわめて曖昧】

マルサスの論点：資本主義を除外した自然状態からの思索

- 自然災害・戦争による定期的な人口低下が起こる：＜高圧＞体制(Wrigley)

- マルサスの想定しなかった体制
  - 出生率と死亡率が理論値よりも低く、恒常的：＜低圧＞体制

- この想定外の体制の要因はどこにあるか？
  - (1)産業発展
  - (2)都市化
  - (3)民主制度